

展示品一覧

○ 大図（気賀街道：静岡県浜松市～愛知県豊川市）

「気賀街道〈自浜松／至長楽村〉首」

国宝：地図・絵図類 番号83、

縮尺 36,000 分の 1、66.8×80.7cm

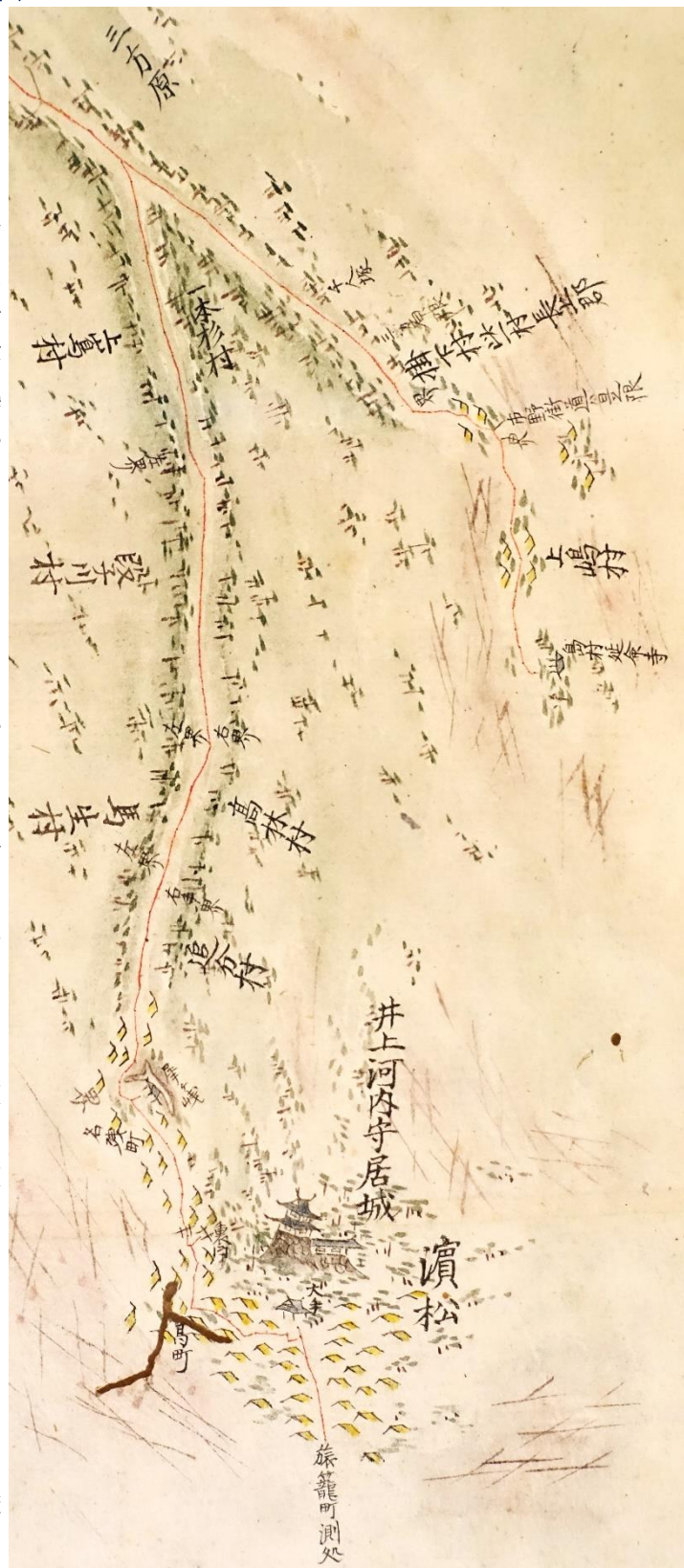
気賀街道を描いた大図2鋪は第6次四国測量の往路、文化5年2月6日に浜松城下を出立してから三河国月ヶ谷村と長楽村の境界までと、長楽村から14日の御油宿（愛知県豊橋市）で東海道に合流するまでの、浜名湖北側を迂回する気賀街道の測量結果だけを反映したものである。そのため気賀街道の測線だけが描かれており、第5次測量の往路で測量済みの浜名湖沿岸はすやり霞で処理されている。また浜松や御油で接続する東海道も描かれていない。

浜松城下には「旅籠町測所」「大手」「裏門」「名残町」の文字や大手門が描かれている。これらはアメリカ大図には記載がない。浜松城下から北上して三方ヶ原で留印杭を残し、南東に三十町ばかり逆行する形で上島村に止宿している。このような行き止まりで測量精度に意味のない測線には有名な寺社や城下があることが多い。しかし『測量日記』には「曹洞宗延命寺、止宿悪し」とだけあり、参詣目的とも思えない。

気賀街道は東海道の見附宿から、安間村一里塚、市野宿などを通ることから、『測量日記』では、三方ヶ原より「安間街道」を掛下村まで進んだと記し、大図には「市野街道是限」と記している。この外にも気賀街道には本坂峠を越えることから本坂通、本坂街道、江戸後期には姫街道の別称も知られている。

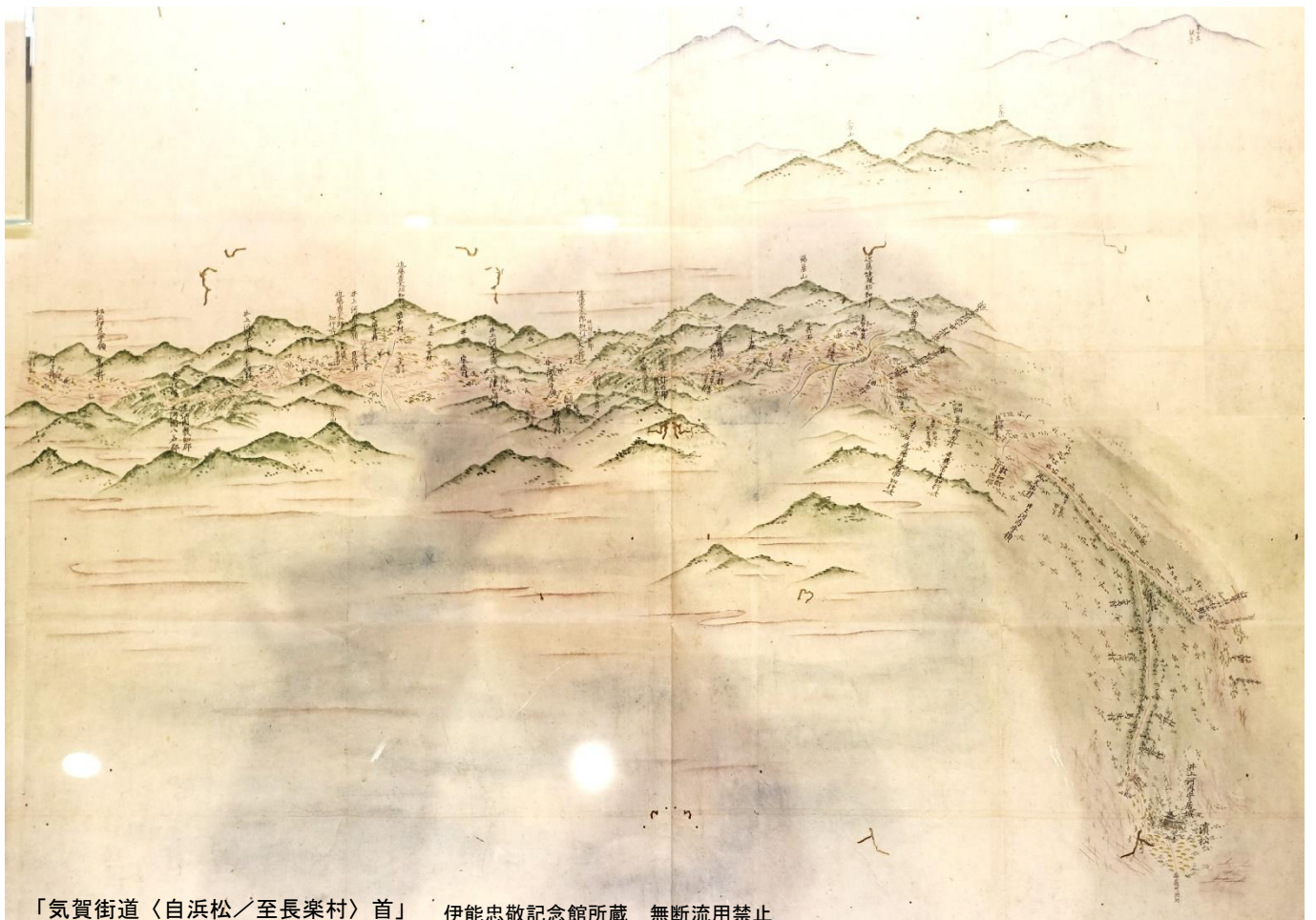
『測量日記』には「此街道は浜名湖今切と成し時街道也という。道巾大に広し。」と注記している。この大図でも立派な並木が描かれている。東海道の重要な脇街道であることから、測線を東海道に繋げるつもりで途中まで測量しておいたのであろうか。アメリカ大図を見ると行き止まりのままで繋がることは無かった。

展示中の2鋪はコンパスローズもなく他図と接続することも想定していない大図である。天測地点の地図合印（記号）は使っていないが、浜松城下と気賀町には「測処」と記されている。村の境界には「右界」「左界」などと記載されている。地図の描画範囲は通常の大図に比べてかなり狭い。伊能忠敬は文化6年1月18日に第6次測量から帰着し、7月25日に第6次測量結果の地図を上呈した。国宝の文書・記録類150番『諸国測量地図北極高度并東西度』の末尾には第6次測量で作製した地図や絵図などのリストが記されている。それによると「一、自遠州浜松歴気賀至三州御油 一里三寸六分之図 一枚」と記載されており、気賀街道の提出大図は1枚にまとめられている。展示中の2鋪は試作品ということであろう。



「気賀街道〈自浜松／至長楽村〉首」部分

伊能忠敬記念館所蔵 無断流用禁止

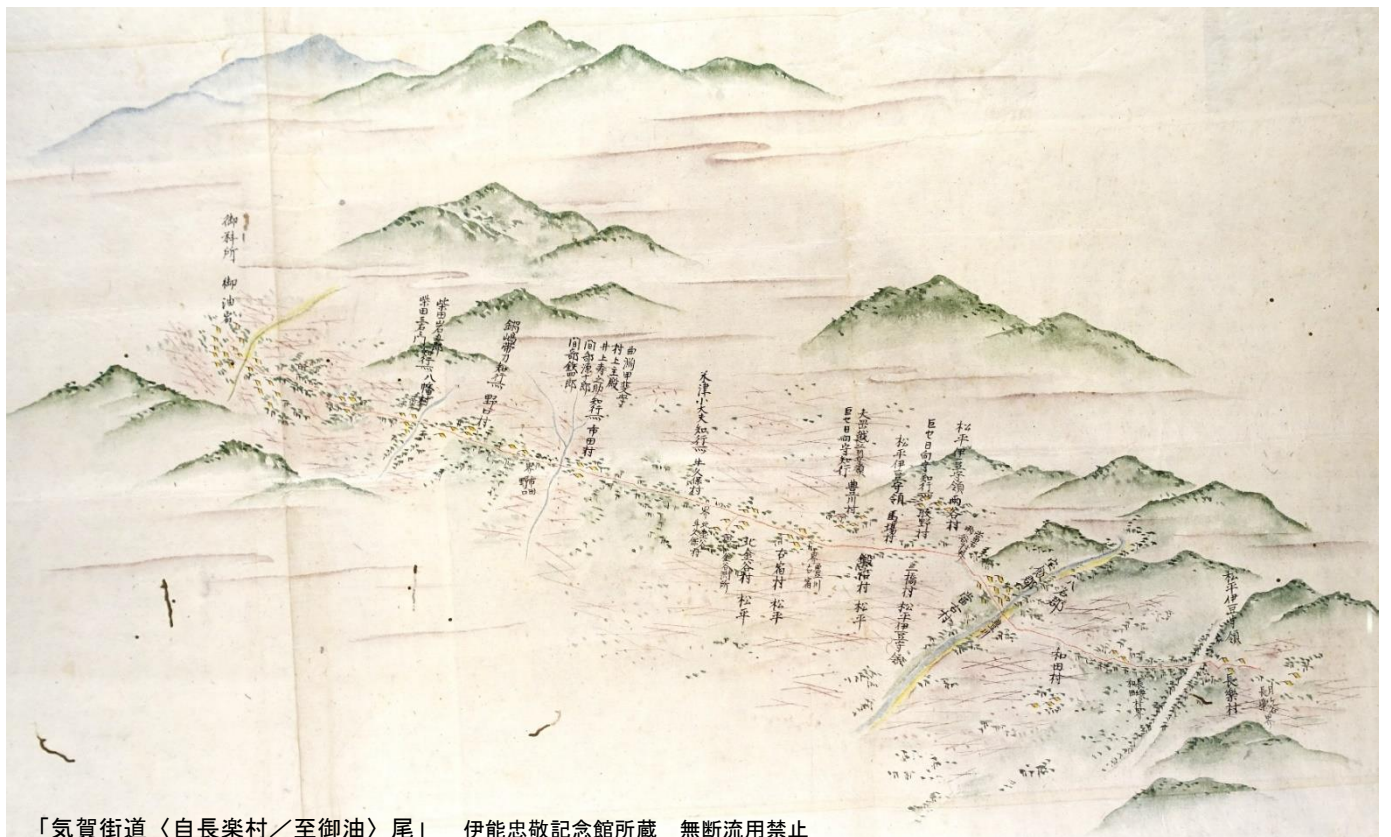


「気賀街道〈自浜松／至長楽村〉首」 伊能忠敬記念館所蔵 無断流用禁止

○ 大図（気賀街道：愛知県豊川市）

「気賀街道〈自長楽村／至御油〉尾」 国宝：地図・絵図類 番号84 縮尺36,000分の1、66.6×80.9cm

文化5年2月13日に嵩山村を出立して、長楽村を過ぎると、気賀街道よりも立派に描かれた街道を横切っている。何という街道であろうか。豊川を渡り、豊川村を過ぎて、北金屋村の烹金寺に泊まった。『測量日記』では「豊川村に稲荷の社あり。国々より参詣群集のよし。古宿村入口より三四町斗なれば一見しぬ」と記す。測線は無いので見物目的である。翌14日に東海道の宿場町の御油に測線を繋いだ。



「気賀街道〈自長楽村／至御油〉尾」 伊能忠敬記念館所蔵 無断流用禁止

○ 小区域下図（羽田周辺） 「自武蔵国荏原郡品川村至武蔵国荏原郡羽田村下図」

国宝：地図・絵図類 番号168 縮尺36,000分の1、63.8×46.1cm

第2次測量に出発した享和元年4月2日の測量分の下図である。伊能忠敬、平山郡蔵と宗平の兄弟、伊能秀蔵、尾形慶助、嘉助の6人は恒例の富岡八幡宮に参拝して出発した。品川宿の村田という料理茶屋で見送りの人たちと酒宴の後、測量が始まった。この下図の測線の北端にも「品川村田初メ」と、下図の隅に記載された図4には「品川村田屋より羽田弁天え」と記載されている。大森からは忠敬らは東海道を川崎宿まで測量し、平山郡蔵、伊能秀蔵、尾形慶助が羽田方面へ手分け測量を行った。この下図は、品川から大森橋で川崎道（東海道）から分岐して羽田の弁天社まで測量し、六郷川（多摩川）で東海道に戻るまでの支隊の手分け測量の成果であり、忠敬本隊の測量した大森から川崎までの東海道は描かれていない。

しかし奇妙である。大森から羽田への測線が南東ではなく、南西に向かっている。図2の『アメリカ大図90号』と比較すると東西が反転しているように見える。また図4の朱枠の中には「此下地図 方位前後違裏ヲ用べし」とあるので、撮影した画像を反転させてみると（図3）と、アメリカ大図の測線と一致する。伊能測量隊とはいえども、第2次測量の初日分の作図では「方位前後違」というミスも犯している。もっとも裏返しにすれば針穴の位置関係は正しくなるので、忠敬が測量した大森から川崎までの東海道の下図と一体化（「別図第一ノ内ニ加」）するときには「裏ヲ用べし」ということなのであろう。図4の裏面の記載事項にも「ふ用といへとも すつへからす」と記されている。「不用といへども捨つべからず」ということである。

この下図には方位線、東西・南北方向の図上の距離を示す朱線や朱字、「六郷川不見、左右共田畑」など様々な情報が書き込まれている。

図1 「自武蔵国荏原郡品川村至武蔵国荏原郡羽田村下図」部分に加筆
伊能忠敬記念館所蔵 無断流用禁止

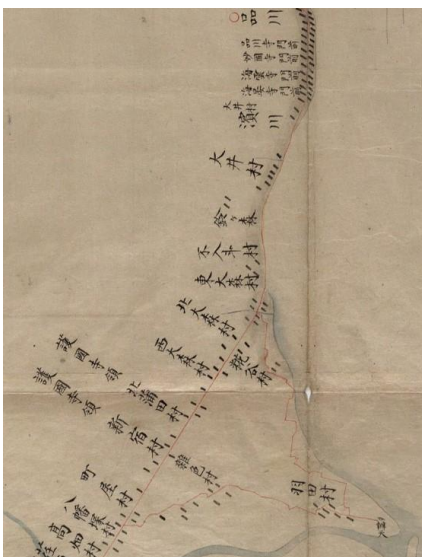
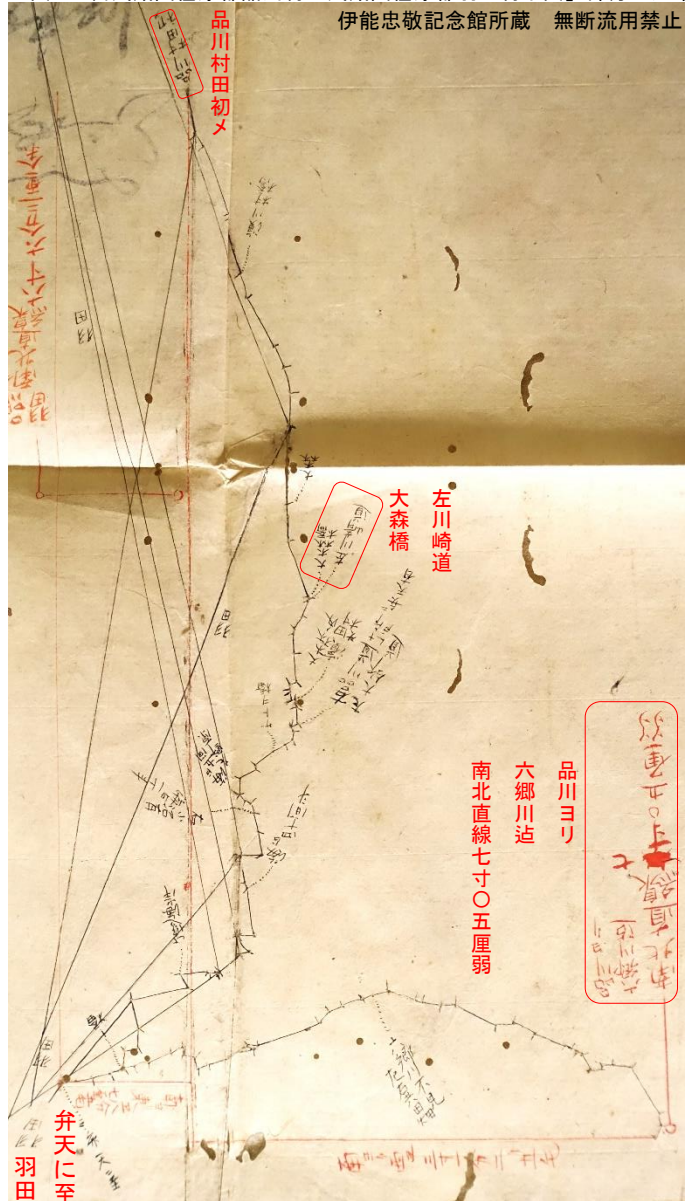


図2 アメリカ大図90号

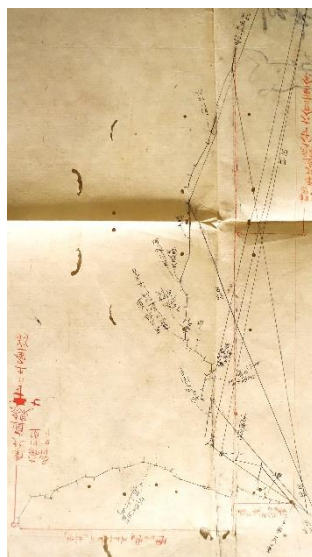


図3 図1を反転

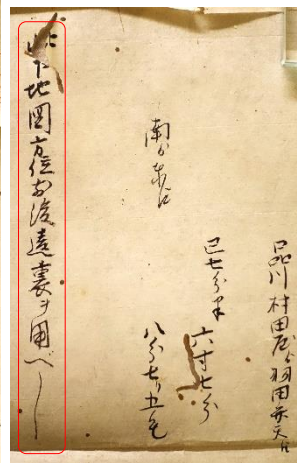


図4 図1の表面記載事項

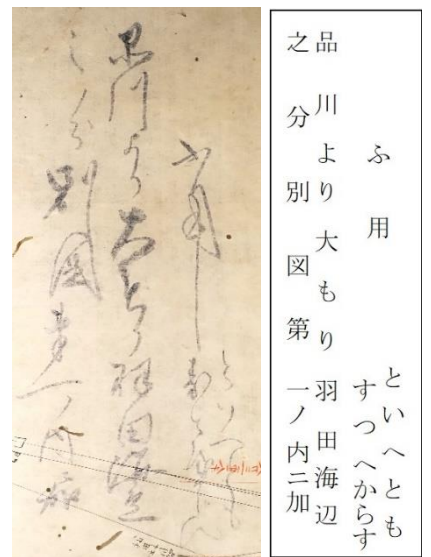


図5 図1の裏面記載事項と翻刻

○ 小区域下図（東海道：川崎宿～保土ヶ谷宿）

「自武蔵国橋樹郡川崎宿至武蔵国橋樹郡保土ヶ谷宿下図」

国宝：地図・絵図類 番号170 縮尺36,000分の1、47.2×61.2cm



「自武蔵国橋樹郡川崎宿至武蔵国橋樹郡保土ヶ谷宿下図」の測線部分、右下は墨書部分 伊能忠敬記念館所蔵 無断流用禁止

図の右上に「東海道第二」と標題のある下図である。墨書部分に「二月二十六日分」とあることから、第4次測量往路の享和3年2月26日に川崎宿を出立し保土ヶ谷宿まで測量した成果であるか、第5次測量往路の文化2年2月26日に宿所の川崎から六郷川（多摩川）川端まで戻り、そこから測量を始め、保土ヶ谷宿まで測量した成果であるか両方の可能性がある。また、「五月十日始源図」（「縮」の上に「原図」の意味で「源」と加筆したか）については、享和3年5月10日の『測量日記』に、大雨のため尾張の大宝新田に逗留して「地図を成」と記されていることに符合する。ところが第5次測量の文化2年5月10日の『測量日記』にも鳥羽で、「高橋、平山は直に石鏡村に至て地図をなす」とありこれも符合する。手掛かりとなる二つの日付けによっても、第4次測量か第5次測量か絞りきれない。

下図自体は測線と両端末の地名、図上の距離が記されているだけで、途中の地名も方位線もないシンプルな下図で同時に展示されている羽田付近の下図とは様相が異なる。東西方向と南北方向の図上距離に対し、斜めの図上距離は何のためだろうか。

「以_二恭尺_一、作_レ之」の「恭尺」が意味不明であるが、「平恭図」を平山郡蔵の実名である「平山季恭」を中国風に「平恭」と略したとすれば、平山郡蔵の所持する尺を使用したことを注記したということになる。

自川崎至保土ヶ谷
二月二十六日分
五月十日始源図
平恭図

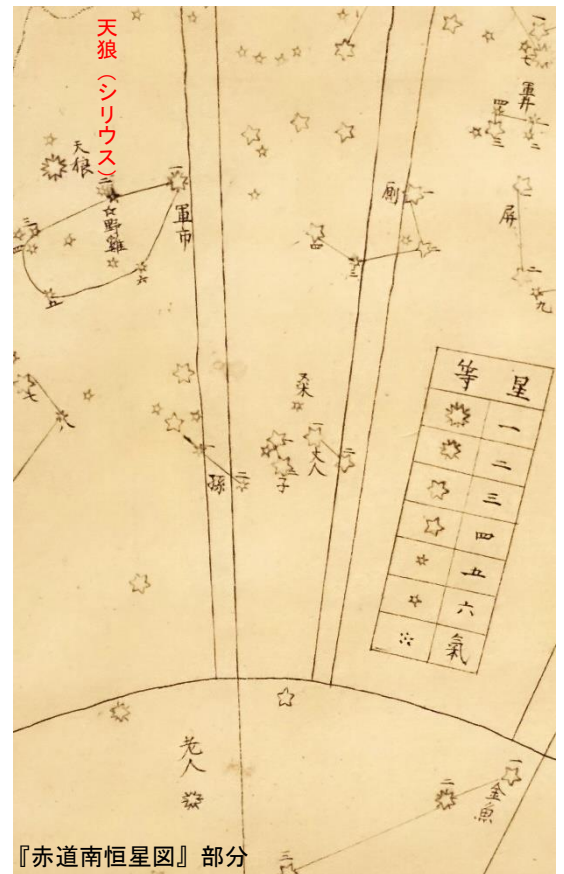
忠敬の嫡孫、忠誨の星図

○「赤道北恒星図」 国宝：文書・記録類 4 8 1 75.3×73.6cm

○「赤道南恒星図」 国宝：文書・記録類 4 8 2 75.6×73.8cm



『赤道北恒星図』



『赤道南恒星図』部分

伊能忠敬記念館所蔵 無断流用禁止

忠敬の嫡孫の伊能忠誨は21歳で夭折したため「未完の天文学者」と呼ばれるが、忠誨に関する資料も国宝の指定を受けている。

忠敬が没してまもない文政元年五月上旬から、数え年13歳の忠誨は暦学稽古を始めた。文政3年11月19日の『伊能忠誨日記』には、数えで15歳の忠誨に対して「高橋侯入来る。予に星図を認めよと仰らる也」と高橋景保から星図作製という課題が与えられた。同月23日には、足立重太郎(足立左内の長男の信順)から「星図の事は、先ず古の実測をしらべ、後に実測にもれし星は、ランダ推歩を用ゆ」と指導を受けた。文政4年1月20日には「今夜より予、恒星測量す」、同年7月22日には星図作製の基礎データとなる『儀象考成』を借りて写し始めた。『儀象考成』はドイツ人宣教師ケーグラ(漢名は戴進賢)らによって北京で観測された恒星表で、乾隆帝による「御製儀象考成序」が冒頭に載せられている。忠誨による写本は現存しており国宝の典籍類518～521である。

文政5年8月24日に忠誨を庇護してきた伯母の妙薫の死を期に、忠誨は同年10月1日には「在所へ引き、折々稽古に出府」することに決めた。この様な状況の中で同月11日から星図作製に取りかかった。地図御用所の二階から九尺の絵図板や三尺定規を暦局に持参し、足立重太郎と和紙を水張りして白罫を引き、朱線を引き経緯線とした。同月24日から「星図突始メル」、文政6年2月22日には「全図突き終わる」とあり、星図は針突法で作図されており、忠敬の地図作成方法が星図作成にも受け継がれている。その後同年10月5日の日記には「南北両円図、並ニ方図ノ元図書入終ル」、文政7年8月10日には「控えの星図出来」、文政8年1月29日には「星図清書初メル」、3月29日には「ふた通り方図、円図出来」、「今夜、方図、円図ふた通りに凡例」と記して星図は完成した。忠誨の日記からは、伊能図と同様に星図にも元図、控え図、清書した提出図があることがわかる。

忠誨の星図については中村士・萩原哲夫「高橋景保が描いた星図とその系統」(『国立天文台報』第8巻第3・4号)で詳細に紹介されている。忠誨の星図については、『儀象考成』における3星図を手本にして文政年間への歳差の補正計算を行い、6等星までを含む精密な星図を編纂することを企図したと評価している。これらの星図では星名も星座も『儀象考成』の中国伝統の名称・形状となっている。

忠敬の天体観測の記録

○「測量日記二」 国宝：文書・記録類 82 22.9×16.5cm

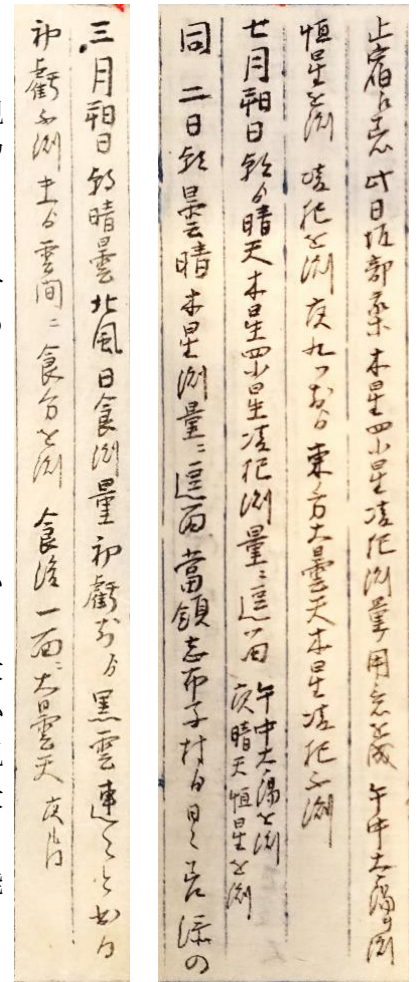
第7次（第1次九州）測量中の豊後の鳩浦（大分県津久見市）での日食観測を記録した文化7年3月1日の測量日記が展示され。前日から同所に逗留して準備したが、「三月朔日、朝晴曇北風。日食測量。初虧前より黒雲連々と出る。初虧不測、夫より雲間に食分を測。食後一面に大曇天。夜も同」という結果となった。初虧（欠け始め）の観測は出来ず、わずかに雲間に食分（日食の欠けた部分）の程度を観測したに止まった。大谷亮吉によるとこの日は江戸暦局も曇りで観測できず、大坂の間重富だけが薄曇りで観測できた。かくも経度の算定は難しかった。

○「測量日記三」 国宝：文書・記録類 83 22.8×16.5cm

同じ第7次（第1次九州）測量中の文化7年6月29日、7月1日、2日の測量日記で、鹿児島城下での木星四小星凌犯の観測の様子が記録されている。

木星四小星凌犯とは木星とイオなど4衛星の交食現象を観測し、江戸、大坂との時刻差から経度差を知ろうとするものである。測量隊は6月26日から桜島に渡って測量を始めたが、忠敬と坂部貞兵衛は鹿児島城下に残って観測の準備を始めた。29日の『測量日記』によると「夜九ッ前より東の方大曇天。木星凌犯不測という結果に終わった。

忠敬の経度測定をめぐる記録については、会報46号の佐久間達夫「伊能測量隊の経度測定」が詳しい。



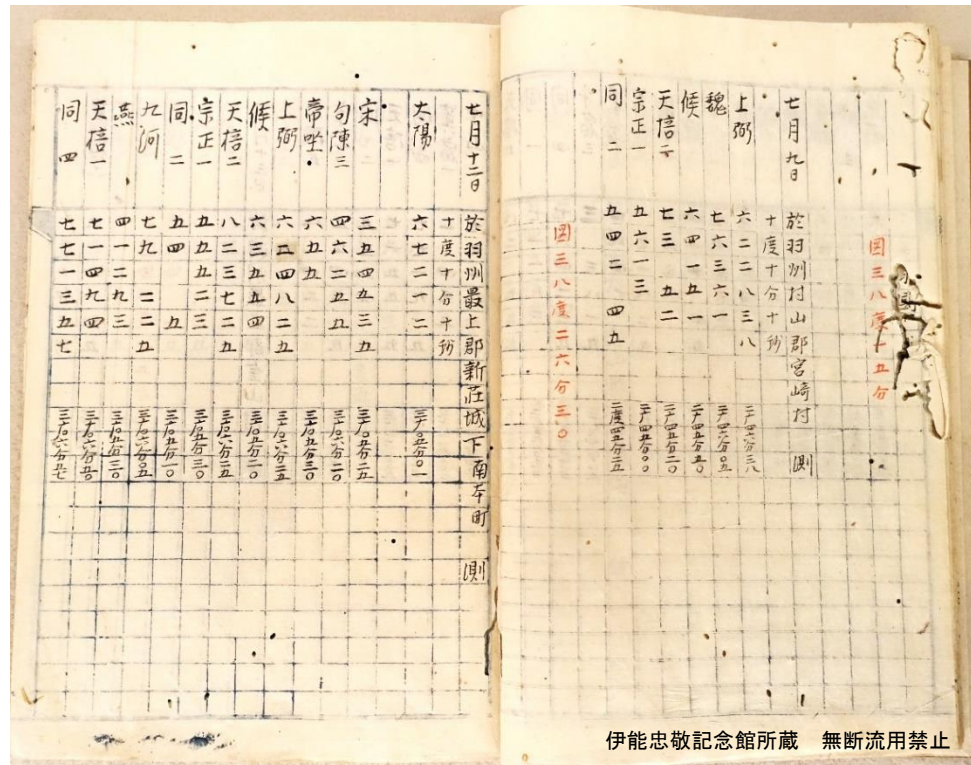
伊能忠敬記念館所蔵 無断流用禁止

○「享和二壬戌歳 北極高度測量記」 国宝：文書・記録類 番号151 23.7×16.7cm

各地点で観測した恒星（上段）の南中視高度（中段）と、原点となる江戸黒江町の忠敬宅で観測した南中視高度（35度40分30秒、大谷亮吉によると実値より13秒大きいとのことである）との緯度差（下段）を算出して平均値を算出し、原点の緯度に加減してその地点の地図上の緯度とした数値を朱書した記録である。もとは数十冊もあったというが、現存するのは享和2年の第3次測量の関東と東北の65地点の記録だけである。

展示されているのは、享和2年7月9日の羽州村山郡宮崎村（山形県東根市）と12日の新庄城下の部分である。宮崎村では『測量日記』に「此夜雲間に少測る」とあるように6星の観測に止まったが、「図三八度二六分三〇」と算出した。新庄城下の緯度については次頁に「図三八度四五分三〇」と算出値を記録している。

『北極高度測量記』は東京地学協会HPのウェブ図書室で公開されている。また中国の星座名や星名については、大阪市立科学館HP内の嘉数次人の「中国星座への招待」が詳しい。



伊能忠敬記念館所蔵 無断流用禁止

○「恒星経緯度」（文化7年）

国宝：文書・記録類 番号161 23.1×16.6cm

各地で恒星の視高度を観測するためには恒星の天体の位置をすることが必要となる。その基礎となったのが『儀象考成』の恒星表であり、イエズス会士が乾隆9年（1743年12月の冬至）の北京で観測したものである。忠敬が作成した文化7年の『恒星経緯度』は大谷亮吉によると、第1段は恒星の漢名と朱書で明るさの等級、第2段は黒江町の視高度の実測値、第3段は『儀象考成』における赤緯に歳差の補正を計算した数値、第4段は『儀象考成』における赤経に歳差の補正を計算した数値とのことである。

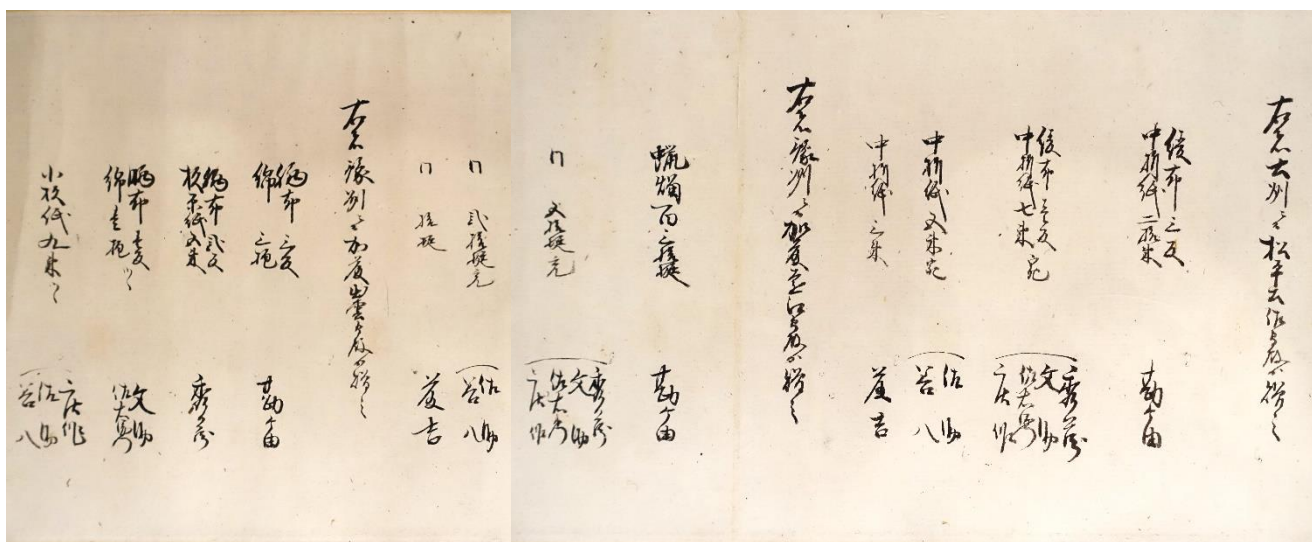
なお、文化10年の恒星表も現存しており、国宝の文書・記録類160の『恒星経緯表』である。また、『欽定儀象考成』の写本が典籍類323～334として国宝に指定されている。

The image shows a page from the 'Constellation Longitude and Latitude' table. It features a grid with columns labeled '東海' (East Sea), '箕宿四' (Four stars of the constellation Ji), and '中山' (Zhongshan). The rows represent different astronomical measurements. The numbers in the grid are arranged in a structured manner, with some handwritten corrections or notes in red and black ink. The paper is aged and shows signs of wear.

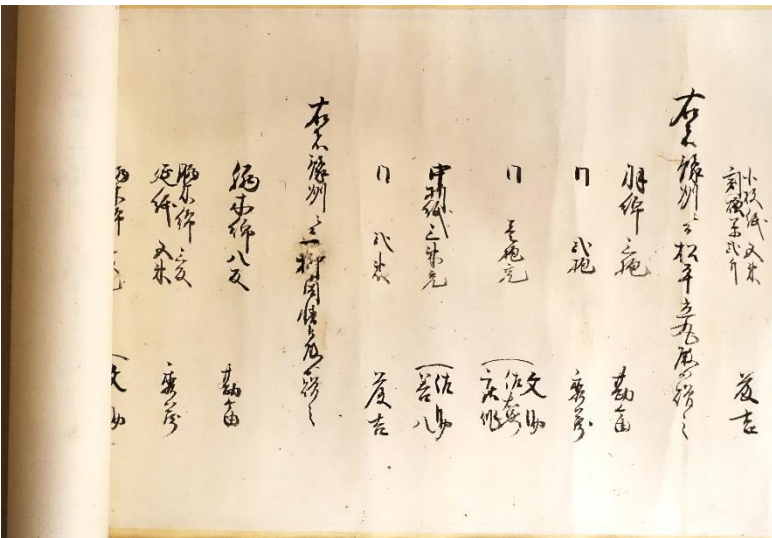
伊能忠敬記念館所蔵 無断流用禁止

四国測量における諸大名の贈り物リスト

○「伊能忠敬書状」 国宝：書状類 番号29 15.0×52.3 cm



第6次測量中に四国の各大名家から受領した贈り物のリストである。『測量日記』にも各地での贈り物を測量隊全員分について詳細に記載している。この資料は測量隊の中で忠敬と忠敬の管下にあった内弟子3名、供侍1名、竿取り2名、従者1名分の受領リストであり、坂部貞兵衛以下4名の天文方下役とその従者の分は含まれない。文末には「右之通贈り物御座候ニ付、受納仕候 巳正月」と記載されている。第6次測量から江戸に帰着した文化6年1月に、忠敬と管下にあった内弟子などの贈り物の受領状況を所属長に報告するために作成された文書の控えであろう。同様に坂部らもまた各自で自分と従者の分を所属長に報告したのではないか。



伊能忠敬記念館所蔵 無断流用禁止

なお、『測量日記』の記載内容とは数量の不一致や、宇和島藩のように記載もれもある。各藩は内弟子3人の1人であるが忠敬の庶子である秀蔵、供侍で忠敬の甥である庄作のランクづけに苦労したようである。

国々測量御用中、領主々より左之通贈り物御座候、	織温飴 一箱	伊能勘ヶ由
五色素麺 一箱	寒制飴 一桶	琥珀丹後袴地
小杉紙壹ヶ宛	足袋七足	稲生秀蔵
三尺手拭壹筋	中折紙 三束 宛	植田文助
刻煙草 五斤	鼻紙壹ヶ宛	久保木佐右衛門
右は淡州二而、松平阿波守殿より贈之 (阿波徳島藩の第十一代藩主蜂須賀阿波守治昭)	雁皮紙 千枚	神保庄作
鰹節 一箱	鼻紙壹ヶ宛	佐助
文助	秀蔵	勘ヶ由
庄作	佐右衛門	文助
佐助	善八	藤吉
右は阿州二而松平阿波守殿より贈之	刻煙草 一包 宛	善八
鰹節百本	小杉糸三拾束	庄作
勘ヶ由	秀蔵	文助
文助	佐右衛門	佐助
善八	藤吉	善八
右は土州二而松平土佐守殿より贈之 (土佐藩十一代藩主山内土佐守豊興)	鰹節五拾本 宛	庄作
勘ヶ由	佐助	善八
善八	藤吉	藤吉
鰹節五本	鰹節拾本 宛	佐助

綾布三反	綾布壹反	秀蔵
中折紙二拾束	中折紙七束 宛	文助
中折紙五束 宛	中折紙三束	左右衛門
右は予州二而加藤遠江守殿より贈之 (伊予国大洲藩十代藩主加藤遠江守泰濟)	同 五拾挺 充	庄作
同 貳拾挺 充	同 拾挺	佐助
同 貳拾挺 充	同 拾挺	善八
同 拾挺	同 拾挺	藤吉
右は予州二而加藤出雲守殿より贈之 (伊予新谷藩六代藩主加藤出雲守泰賢)	晒布 三反	勘ヶ由
晒布 三抱	晒布 貳反	秀蔵
晒布 貳反	晒布 貳反	文助
杉原紙 五束	晒布壹反	佐右衛門
綿壹抱	綿壹抱	庄作
小杉紙九束ツ、	小杉紙 五束	佐助
小杉紙 五束	刻煙草 貳斤	善八
右は予州二而松平立丸殿より贈之 (伊予松山藩の第十代藩主松平定則(幼名立丸))	刻煙草 貳斤	藤吉

○「宿泊木札」

国宝番号：器具類56 縦60.4、横11.8、厚1.6cm

宿泊施設に掲げた看板。両面に「伊能勘解由泊」と墨書されている。勘解由は忠敬の隠居後の通称。



右は予州二而一柳因幡守殿より贈之、
 (伊予小松藩の第七代藩主一柳因幡守頼親)

同 式束	同 壹抱充	同 壹抱	羽綿三抱
藤吉	佐助	庄作	文助
善八	佐右衛門	秀蔵	勘ヶ由

○「組立机」 国宝：器具類 番号55 32.7×96.7×高さ25.8cm

木製の組見立て式の机で、右袖には引出しが3段あり、左袖は棚が2段で、左右ともに慳食蓋が付いている。天板、左右の袖の部分の3箇に分解できるので持運びが容易である。

○大図（宮城県：石巻市～気仙沼市）

「自江戸至奥州沿海図 第十一〈自石巻/至岩尻〉」

国宝番号：地図・絵図類67

縮尺1/36,000 174.3×87.1cm

大図の欄外には「自石巻 北三尺九寸六分九厘

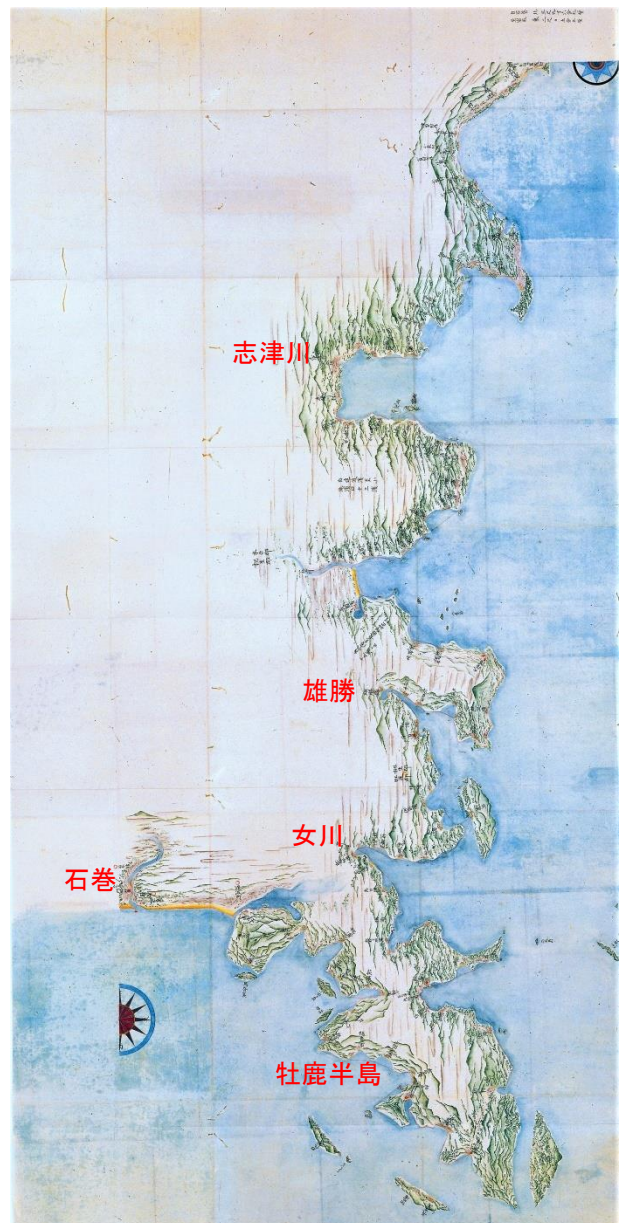
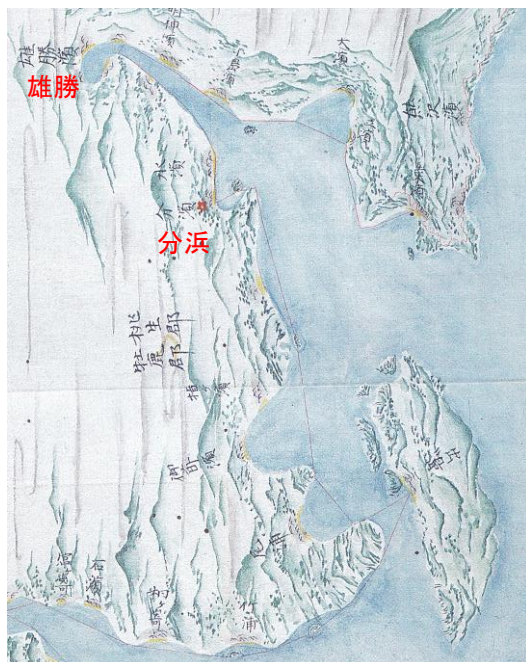
至岩尻 東二尺〇五分五厘」と地図上の寸法

が墨書されている。第2次測量の往路の享和元年8月29日～9月15日の十七日間をかけて測量した範囲である。

三陸のリアス式海岸が始まると断崖絶壁の海岸が続き、陸上での測量は困難になった。日記には連日のように「船中引縄にて測る」などと記され、大図には海上の朱色の測線が目立つ。

会報53号の渡辺一郎氏による「再現！海上引縄測量」の記事があり、海上引縄測量が具体的にわかり貴重である。

この大図は伊能忠敬記念館HPの「資料画像提供」で公開されており、所蔵先を明記すれば、手続き無しで利用できる。



○ 大図（宮城県気仙沼市～岩手県釜石市）

『自江戸至奥州沿海図 第十二〈自岩尻/至唐丹〉』

国宝番号：地図・絵図類 68 縮尺1/36,000 132.2×87.5cm

大図の欄外には「自岩尻 北三尺九寸七分二厘 至唐丹 東二尺一分六分三厘」と地図上の寸法が墨書されている。第2次測量の往路の享和元年9月15日～24日の10日間で測量した範囲である。

大船渡を過ぎたあたりから、右のアメリカ大図のように岬をめぐって「海上引縄」を行うことは減り、岬の付根を横切るだけの簡易な測量となっていた。9月23日の『測量日記』には「大石浜より船にて引縄測る。是を終とす」と記されている。右図の矢印が最後の海上引縄測量の測線である。海上引縄は時間がかかりすぎるのである。石巻～岩尻の大図の区間は17日かかっている。海上引縄を実施しなかった唐丹～田老の大図の区間は8日で測量できたが、西暦では11月に入っていた。三陸海岸測量が終わって浜三沢では大吹雪に見舞われる羽目になった。



○ 大図（宮城県気仙沼市～岩手県釜石市）

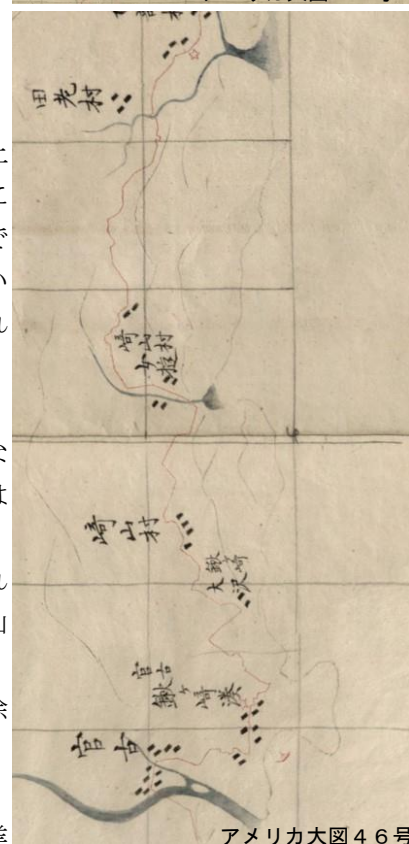
『自江戸至奥州沿海図 第十三〈自唐丹/至田老〉』

国宝番号：地図・絵図類 69 縮尺1/36,000 170.0×87.6cm

大図の欄外には「自唐丹 北五尺四寸〇三厘 至田老 東九寸一分二厘」と地図上の寸法が墨書されている。第2次測量の往路の享和元年9月24日～10月2日に測量した範囲である。ここで仙台藩領から南部藩領に代わる。これまでの仙台領では止宿、村役人の案内、難所の道普請などまで委細にわたり領主から通達されていた。南部領大槌町役人によると幕府勘定奉行の公儀触れは勿論、領主からの御触れもないとのことであった。仙台領の村役人が南部領側と掛け合ってくれなかったら、宿泊にも困るところであったと慨嘆している。

右のアメリカ大図の宮古のあたりから三陸海岸の様相が変わる。宮古から北になると、海岸線の出入りが少なく単調だが海食崖が続くので、海岸線に沿った測量は出来ていない。

ところで9月8日の分浜での止宿先の秋山惣兵衛との再会のエピソードが知られている。忠敬と亡妻ミチは松島旅行の際に「交易の事に銚子港」に来た帰りの秋山惣兵衛と偶然一緒になり、再会を約して別れていた。24年ぶりの再会を「不思議」として、測量日記に書き留めている。9月15日には気仙沼での止宿先の日除儀右衛門について、「先年米交易の事にて佐原村へ罷越し」忠敬宅で会ったことがあるといわれ、「不思議の事」と記している。9月28日には忠敬は測量隊を離れ吉里々々村の前川善兵衛を訪問した。前川家は東北地方と江戸を結ぶ東廻り廻船業で財を成していた。これらのエピソードから浮かび上がるのは、東北地方の諸藩と江戸を結ぶ大きな物流の存在である。東北各地の米穀など諸物資が東廻り航路で銚子港へ、そこで高瀬舟に積み替えて利根川、江戸川、小名木川をへて江戸市中へ、江戸からは下り荷物が送られる。利根川下流の水運の中心地である佐原の豪商であった忠敬が三陸海岸を測量すれば、各地の江戸廻米の担い手たちに出会うことは、「不思議」ではなく当然のことであった。



上記の国宝以外に、明治政府による伊能忠敬に対する正4位の贈位に関する文書が展示されている。

- ・「伊能忠敬先生贈位始末」 旧伊能洋家文書177-2-1
- ・「故伊能忠敬先生事蹟」 旧伊能洋家文書177-1-1
- ・「贈正4位 達」 旧伊能洋家文書167-1-1

なお、国立公文書館デジタルアーカイブでは「故伊能忠敬へ贈位ノ件」として、展示品を含む決裁文書一式が公開されている。「故伊能忠敬へ贈位ノ件」を含む『公文録』は国の重要文化財に指定されている。